

授業科目	グリーフ・ターミナルケア		
担当教員	伊藤麻衣・花谷香織		
時間数	6 時間	区分	前期 ・ 後期
<b>授業概要(授業のねらい・内容)</b> <b>目的</b> 1. 死の概念や理念を理解し、簡潔に説明できる 2. 子どもや家族が向き合う死やグリーフのプロセスを理解し、支えられる 3. Loss, grief, & deathに対する自身の心の動きを理解できる 4. 子どもや大人のための実践的なグリーフサポートを考えることができる  <b>ゴール</b> 1. Grief& Lossに関するそれぞれの理論を学ぶ 2. Lossによる変化が家族ひとりひとりに与える影響を理解する 3. それぞれ違った年代、性別、文化の人々の死の受けとめかたを学ぶ 4. 子どもや家族を支えるアセスメントツールのアイデアおよび作成 5. プロフェッショナルとして子どもや家族に接する時の実践的で適切なコミュニケーションスキルを学ぶ 6. Loss/ deathを経験した子どもや大人へのグリーフプログラム 7. セルフケアの大切さを学ぶ			
<b>授業の進め方(授業形態を含む)</b> 講義、ビデオ鑑賞、及びディスカッション			
<b>テキスト・参考文献</b> 1. Webb, N. Helping Bereaved Children: A Handbook for Practitioners 2. Jarratt, C. Helping Children Cope With Separation and Loss 3. Romain, T. What on Earth Do You Do When Someone Dies? 4. Covington, S. Silent Birth When Your Baby Dies 5. Centering Corporation, Being with Parents After Their Child or Baby Dies 6. Centering Corporation, Father's Grieve, Too			
<b>成績評価の方法・基準</b> 講義への出席及び参加態度、ディスカッションとレポート			
<b>備考</b>			

授業科目	家族・兄弟姉妹の支援		
担当教員	石田 智美		
時間数	6 時間	区分	前期 ・ 後期
<b>授業概要(授業のねらい・内容)</b> 1. 医療現場における子どもの家族、とりわけ兄弟姉妹への支援の在り方と方法論について理解する 2. 親が病気をもつ子どもへの支援の在り方と方法論について理解する 3. 1, 2について、医療現場での実践に向けて事例をもとに考察・検討をおこなう			
<b>授業の進め方(授業形態を含む)</b> 講義及びディスカッション			
<b>テキスト・参考文献</b> ・ナーシング・トゥデイ 2009年1月号, がん患者を親にもつ子どもたちのケア,p68-69,日本看護協会出版会 ・乳がんの親とその子どものためのプロジェクト おかあさんだいじょうぶ? 小学館 2010 ・Nancy Boyd Webb, DSW(2002)Helping Bereaved Children:A Handbook for Practitioners ほか			
<b>成績評価の方法・基準</b> 受講態度およびレポートの内容により評価する			
<b>備考</b>			

授業科目	病院システム・医学情報(医師の立場から)		
担当教員	宮城県立こども病院 林 富		
時間数	3 時間	区分	前期 ・ 後期
<b>授業概要(授業のねらい・内容)</b> 1) 病院の種別(こども病院病院と総合病院)・病院の組織(看護部を除く)。 2) 医療法上のシステム 3) 病院運営システム(国立、自治体立、地方独立行政法人など) 4) 医療情報システム 5) 電子カルテと紙媒体カルテ 6) こども病院について(宮城県立こども病院の紹介)・当院のチャイルドライフスペシャリスト(CLS)の働きについて 7) 小児医療について			
<b>授業の進め方(授業形態を含む)</b> 1) 基本的には、パワーポイントを用いて講義する。 2) 上記内容について説明し、質問を受け理解を深める。			
<b>テキスト・参考文献</b> 「病院の機能と組織」、「病院運営」、、「医療情報システム」、「電子カルテ」、「こども病院」、「チャイルドライフスペシャリスト(CLS)」がkey wordです。			
<b>成績評価の方法・基準</b> 質疑(Interactive lecture)により評価します。			
<b>備考</b>			

授業科目	研究方法論		
担当教員	小澤美和		
時間数	2 時間	区分	前期 ・ ○後期
<b>授業概要(授業のねらい・内容)</b> 成人医療におけるチャイルド・サポートの関わりが母子に与える効果を調査研究として測るための方法論の例を知る。成人がん医療における患者(とくに乳がん患者)の子どもの状況を知るためのスケールにはどんなものがあり、どのスケールを利用するのか。関わりによって何を期待し、結果子どもたちの状態はどうなるかの仮説をたて、調査・研究を組み立てていく過程を知る。			
<b>授業の進め方(授業形態を含む)</b> ①面談記述からの質的研究 ②質問紙と人口動態背景・医学的背景などを収集し、かかわり前後の変化をみる量的研究の計画、実施の実際と、その調査結果を含めて示す。			
<b>成績評価の方法・基準</b> 記述式試験において、①研究の種類にはどんなものがあるか、概要が書ける。②仮説をたて、知りたい情報の項目を挙げられることができる。			
備考			

授業科目	おもちゃ・遊びケア論		
担当教員	多田千尋		
時間数	時間	区分	前期 ・ 後期
<b>授業概要(授業のねらい・内容)</b> 身体の栄養を食べ物で補うように、心の栄養も病児にとって必須だ。「絵本」や「おもちゃ」「折り紙」「あやとり」などさまざまなものが心の栄養素となるが、成長・発達に即した基本的な知識や子どもとのコミュニケーションを円滑にするための遊びやおもちゃの技術論を学ぶ。また、医療・看護との連携と協同が不可欠のプレパレーション及び幼児教育、保育の中での遊び・おもちゃの新しいケアの形を見出し、計画・連携の実行をするうえで、その方法を探り、遊び環境論を展開する道標を検証する。			
<b>授業の進め方(授業形態を含む)</b> 1. 講義 2. 実習 3. レポート			
<b>テキスト・参考文献</b> 参考文献:『おもちゃコンサルタント入門』①②(黎明書房) 参考文献:『おもちゃで遊ぼう』(日本グッド・トイ委員会) 参考文献:『遊びが育てる世代間交流』(黎明書房) 参考文献:『病児のための遊びとおもちゃ』(中央法規出版)			
<b>成績評価の方法・基準</b> レポート評価			
<b>備考</b> 可能であれば東京おもちゃ美術館で授業を実施したい。			

授業科目	特別講義 多職種との連携		
担当教員	中村 崇江		
時間数	時間	区分	前期 ・ 後期
<b>授業概要(授業のねらい・内容)</b> <ねらい>多職種との協働の大切さを理解する。多職種の専門性を理解したうえで、どのように協働していくのか考える。<内容>・保育士の専門性(役割)について・保育士の病棟での活動の概要(この中に多職種とどのように協働しているかも含む)・こども療養支援士に望むことや保育士との協働について、講義の後グループディスカッションを行う予定。			
・講義:パワーポイントを使用して行う。・その後、多職種と協働することに対してのグループディスカッションを行う。			
<b>テキスト・参考文献</b> テキストは、パワーポイントの中から作成予定です。参考文献は、日本医療保育学会の資格認定テキストと「病気の子どもの社会心理的入門」(谷川先生が書かれたもの)です。			
成績評価の方法・基準			
備考			

授業科目	プログラムの運営管理		
担当教員	吉崎 さやか		
時間数	6 時間	区分	後期
授業概要(授業のねらい・内容)			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・病院でプログラムを開始・実施するときの方法論を学ぶ</li> <li>・プログラムの計画と評価</li> <li>・他職種との連携</li> <li>・他職種やボランティアへの教育</li> <li>・プログラムの運営と予算計画など</li> </ul>			
授業の進め方(授業形態を含む)			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義および実践演習</li> </ul>			
テキスト・参考文献			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・THE HANDBOOK OF CHILD LIFE</li> <li>・Child Life in Hospitals</li> <li>・Psychosocial Care of Children in Hospitals</li> </ul>			
成績評価の方法・基準			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業への参加</li> <li>・課題レポート</li> </ul>			
備考			

授業科目	特別講義：多職種と連携するためには		
担当教員	及川郁子		
時間数	3 時間	区分	前期 ・ 後期
授業概要(授業のねらい・内容)			
<p>チーム医療は医療現場に不可欠なケア方法ですが、実践していくにはチームメンバーそれぞれが自覚を持って取り組んでいく必要があります。この科目では、子どもたちに関わる職種の役割や位置づけについて理解し、チーム医療を促進するための方略について考えます。</p>			
授業の進め方(授業形態を含む)			
<p>講義とセミナー          事前課題: 実習中に見学または関わった他・多職種連携(看護師が関わっているとよい)の場面を記述し、次の視点から分析する。          ・その時の連携の目的は何か          ・それぞれの職種の役割や内容は何か          ・連携上の長所、短所として捉えたこと          ・よりよいチーム医療のために課題としてみえたことや考えたこと          レポートA42枚程度にまとめる。(10月3日までに提出)当日発表していただきます。</p>			
テキスト・参考文献			
<p>テキストは特に指定しません。          参考文献          ・鷹野和美(編): チーム医療論、医歯薬出版、2006          ・細田満和子: チーム医療の理念と現実、日本看護協会出版会、2003</p>			
成績評価の方法・基準			
<p>授業への参加度50% 事前学習50%</p>			
備考			
<p>事前学習の提出先 ikuko-oikawa@slcn.ac.jp (不明な点などありましたらご連絡下さい)</p>			



授業科目	子ども療養支援概論Ⅰ		
担当教員	藤井あけみ		
時間数	6 時間	区分	前期 ・ 後期
<b>授業概要(授業のねらい・内容)</b> 1 子ども療養支援士とはⅡ 子ども療養支援士の理念および目的について考え語り合う  2 心理社会的援助論Ⅱ 子ども療養支援士の業務の中心となる心理社会的援助とは何かを考察する  3 現代の子ども事情Ⅱ 現代の子どもの在り方と子どもを取り巻く環境を検証し、自らの使命を考える			
<b>授業の進め方(授業形態を含む)</b> 講義及びディスカッション			
<b>テキスト・参考文献</b> テキスト(教科書) 『チャイルド・ライフの世界』(藤井あけみ 新教出版社)『こどもにやさしい病院』(藤井あけみ 小学館)、『幸福のレシピ』(藤井あけみ 新教出版社)  参考文献 『いのちの時間』(藤井あけみ訳、新教出版社)『脳内汚染からの脱出』(岡田尊司 文春新書)			
<b>成績評価の方法・基準</b> ディスカッションとレポートによって評価する			
<b>備考</b> 受講前にテキストと参考文献はよく読み、当日持参すること			

授業科目	実習		
担当教員	(大阪母子) 後藤真千子, 伊藤麻衣 (順天堂) 早田典子, 田中恭子		
時間数	700 時間	区分	前期 ・ 後期
<b>授業概要(授業のねらい・内容)</b> 子ども療養支援士として修得が必要な理論を全科目において実践できる技術能力を身につける。			
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ オリエンテーションにより病院内の成り立ち、多職種の仕事について知る。</li> <li>・ 治癒的活動の週間スケジュール、個々の遊び日ケアプログラム、日誌、行動観察、等を作成することにより、 子どもや家族への関わりの必要性、内容、アウトカム、効果的治癒的活動を学ぶ。</li> <li>・ 院内で子ども療養支援士として役割を果たすために必要な技術を習得する(カルテの書き方、紹介状の書き方、ボランティアとの関わり、多職種へ向けての講義、等)</li> <li>・ 院内組織/システムを学ぶ。</li> </ul>			
<b>授業の進め方(授業形態を含む)</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1週に2時間程度の授業時間を設け、実習の目的の説明、質疑応答等を行う。</li> <li>・ 成果ファイル(ポートフォリオ)を制作する。</li> <li>・ スーパーバイザーのアドバイス、グループディスカッション等により技術能力を上げる。</li> </ul>			
<b>テキスト・参考文献</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 『子ども療養支援士認定コース 受講生ハンドブック』</li> </ul>			
<b>成績評価の方法・基準</b> 到達目標エビデンスシートを用い、成果ファイルの中から、それぞれの技術能力が、目標に到達したことを示す証拠を3回集めることが求められます。それぞれが到達目標に達しておれば、スーパーバイザーにより確認され、個々の技術を習得したことになります。全ての技術が目標レベルに到達した場合を合格とする。			
<b>備考</b>			

〔シラバス製作：子ども療養支援協会教育委員会〕

委員長	藤井あけみ	北海道大学病院 腫瘍センター 緩和ケアチーム CLS
副委員長	後藤真千子	大阪府立母子保健総合医療センターHP 士・HPS
副委員長	田中恭子	順天堂大学医学部小児科准教授・HPS

委員（五十音順）

石田智美	聖路加国際病院プレストセンター CLS
伊藤麻衣	大阪府立母子保健総合医療センターホスピタルプレイ士 CLS
井上絵未	済生会横浜市東部病院 CLS
桑原和代	静岡県立こども病院 CLS・看護師
世古口さやか	三重大学医学部附属病院 CLS
花谷香織	宮城県立こども病院 CLS
早田典子	順天堂大学医学部小児科 CLS
平田美佳	聖路加国際病院小児看護専門看護師・HPS
松井基子	茨城県立こども病院 CLS
三浦絵莉子	聖路加国際病院プレストセンターCLS
山地理恵	大阪市立総合医療センター 保育士・HPS

本認定コース事業は、平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）、重症の慢性疾患児の在宅と病棟での療養・療育環境の充実に関する研究（主任研究者：田村正徳、分担研究者：田中恭子）の研究事業となっています。

〔お問い合わせ先〕

〒113-8421 東京都文京区本郷2-1-1 順天堂大学医学部小児科・思春期科内  
子ども療養支援協会事務局担当 田中恭子 早田典子  
TEL: 03-3813-3111 Fax:03-5800-0216

子ども療養支援士認定コース

指導者マニュアル

2011年4月1日

編集・発行 子ども療養支援協会

発行者 事務局長 田中恭子

〒112-8421

東京都文京区本郷 2-1-1

03-3813-3111 (Tel)

03-5800-0216 (Fax)





2011/7019A (資料2)



**第1回**

**日本小児在宅医療支援研究会**

**プログラム・抄録集**



～全国規模の小児在宅医療支援ネットワークを目指して～

**日時** 2011年10月29日(土) 9:50～18:00

**場所** 大宮ソニックシティ 市民ホール

**会長** 田村 正徳 (埼玉医科大学総合医療センター小児科)

## 日本小児在宅医療支援研究会発足に向けて

重度の障害を持った赤ちゃんにとっても、終末期に近い悪性腫瘍のお子さんにとっても、病状が安定していれば、アラーム音の飛び交う病室ではなくて家族の話し声や笑顔に包まれた自宅で過ごす方が幸せであることは自明のことでしょう。

しかしながら我が国の現状では医療ケアを要する子どもが在宅療養に移行した場合には、母親を中心とした家族に過大な負担がかかることとなります。我が国では子どもの在宅医療に対する社会資源による支援があまりに貧弱です。更には日本の縦割り行政の中で医療と福祉の壁が大きく立ちはだかっています。預かりレスパイトは医療保険ではカバーできず、重心施設では報酬単価が低いため高度の医療ケアを要する乳幼児は敬遠されがちです。介護保険の適用されない小児では、訪問看護も医療保険で施行され経済的負担の他に種々の制約があります。基礎疾患やケアの個別性の高い子どもの在宅医療では経済的なデメリットが大きいので在宅療養支援診療所も尻込みしがちです。

こうした種々の問題を少しでも改善するためには、謙虚に患児やご家族の声に耳を傾けながら総合病院・小児専門医療機関・重心施設・在宅療養支援診療所・訪問看護ステーション・福祉・教育・行政関係者を結ぶネットワークが必要です。その第一歩として日本小児在宅医療支援研究会を発足させることにしました。小児の在宅医療推進は NICU や小児救急患者の入院可能病床を広げることにもなり、日本全体の子どもの安全性の拡大にも寄与します。本研究会ではそうした観点も一般市民や行政に訴えて、社会全体として医療ケアを要する子どもの在宅療養を支援するシステムを構築したいと考えています。

この度はそうした志を抱く方々に呼びかけて大宮ソニックシティにおいて第一回日本小児在宅医療支援研究会を開催する運びとなりました。子どもの在宅医療支援システムの構築に向けて活発な情報交換と議論が展開され、実り豊かな一日となることを願っています。

平成 23 年 10 月吉日

重症の慢性疾患児の在宅と病棟での療養・療育環境の充実に関する研究

研究代表者 田村正徳（埼玉医科大学総合医療センター小児科）

**第1回 日本小児在宅医療支援研究会**  
**「全国規模の小児在宅医療支援ネットワークを目指して」**

会 場：大宮ソニックシティ 市民ホール

日 時：2011年10月29日（土） 9：50～18：00

開会挨拶

9：50

田村 正徳

一般演題

10：00～11：40

**【part A：在宅ケアに向けて】**

座長 小沢 浩（島田療育センターはちおうじ小児神経科）

國方 徹也（埼玉医科大学総合医療センター新生児科）

**A-1** 医療的ケアが必要な患児に対して、在宅療養不安が強い家族への支援  
—病棟師長の立場から—  
群馬県立小児医療センター  
○清水 奈保（病棟看護師長）

**A-2** 重症心身障がい児が在宅で暮らすための支援  
群馬県看護協会訪問看護ステーション  
○阿久沢とも子、大槻 雪枝、田中 孝子、山路 聡子

**A-3** 当院の在宅医療支援チームによる  
地域基幹病院の長期入院児在宅移行に関する診療支援  
<sup>1)</sup>長野県立こども病院リハビリテーション科、<sup>2)</sup>新生児科、  
<sup>3)</sup>患者支援・地域連携室、<sup>4)</sup>長野赤十字病院 小児科  
○河野 千夏<sup>1,3)</sup>、笛木 昇<sup>1)</sup>、中村 友彦<sup>2)</sup>、天野 芳郎<sup>4)</sup>、牧内 明子<sup>3)</sup>

**A-4** 当院における NICU 退院後の在宅支援  
大阪市立総合医療センター新生児科  
○田中 裕子、市場 博幸、江原 英治、寺田 明佳、原田 明佳、  
岩見 裕子、松村 寿子



**A-5 長期入院児の現状と在宅医療支援室の地域連携に向けた活動について**

大阪府立母子保健総合医療センター

○峯 一二三、荒川つくし、上田智加子、藤井みどり、中川 紋子、  
水出 明子、村田 瑞穂、広瀬 正幸、望月 成隆、鳥邊 泰久、  
川原 央好、位田 忍

**A-6 大阪府における長期入院児退院促進等支援事業の活動について**

<sup>1)</sup>大阪府長期入院児退院促進等支援事業トータルコーディネーター、

<sup>2)</sup>大阪府立母子保健総合医療センター、<sup>3)</sup>愛染橋病院、

<sup>4)</sup>大阪市立総合医療センター、<sup>5)</sup>高槻病院、<sup>6)</sup>淀川キリスト教病院

○鳥邊 泰久<sup>1),2)</sup>、望月 成隆<sup>1),2)</sup>、隅 清彰<sup>3)</sup>、川脇 壽<sup>4)</sup>、南 宏尚<sup>5)</sup>、  
和田 浩<sup>6)</sup>、位田 忍<sup>2)</sup>

**A-7 新生児・小児在宅支援コーディネーターの機能と課題**

<sup>1)</sup>大分県立病院 新生児病棟、<sup>2)</sup>新生児科

○品川 陽子<sup>1)</sup>、飯田 浩一<sup>2)</sup>

**【part B：在宅でのケア】**

座長 船曳 哲典（藤沢市民病院こども診療センター）

森脇 浩一（埼玉医科大学総合医療センター小児科）

**B-1 小児在宅医療支援における訪問リハビリテーションの役割**

～呼吸障がいに対して発達的な視点から関わったお子さんを通して～

<sup>1)</sup>あおぞら診療所新松戸、<sup>2)</sup>子ども在宅クリニックあおぞら診療所墨田

○長島 史明<sup>1)</sup>、中川 尚子<sup>1),2)</sup>、西尾 玲子<sup>1)</sup>、川崎麻由子<sup>1)</sup>、平井 孝明<sup>2)</sup>、  
南條 浩輝<sup>1)</sup>、前田 浩利<sup>1),2)</sup>

**B-2 当センターにおける在宅重症児の病診連携の実際**

<sup>1)</sup>国立成育医療研究センター 総合診療部、<sup>2)</sup>新生児科、

<sup>3)</sup>医療連携・患者支援センター、<sup>4)</sup>生体防御系内科

○余谷 暢之<sup>1),3)</sup>、中村 知夫<sup>2)</sup>、小穴 慎二<sup>1),3)</sup>、木暮 紀子<sup>3)</sup>、西海 真理<sup>3)</sup>、  
宮澤 佳子<sup>3)</sup>、横谷 進<sup>3),4)</sup>

**B-3 当センターにおける在宅人工換気療法の現状と地域連携**

—臨床工学技士の立場から—

埼玉県立小児医療センター

○松井 晃（臨床工学技士）

**B-4 在宅重症心身障害児の地域生活支援**

～小児科診療所における試み～

能見台こどもクリニック

○小林 拓也、神前 泰希、二宮 悦、篠塚 宏

**B-5 当センターでのショートステイの現状と課題について**

<sup>1)</sup>社会福祉法人愛徳福社会 大阪発達総合療育センター 南大阪療育園、

<sup>2)</sup>重症心身障害児施設 フェニックス、<sup>3)</sup>地域医療連携部

○竹本 潔<sup>1,2)</sup>、船戸 正久<sup>1,2)</sup>、馬場 清<sup>1,2)</sup>、飯島 禎貴<sup>1,2)</sup>、柏木 淳子<sup>1,2)</sup>、  
塩見 夏子<sup>1,2)</sup>、近藤 正子<sup>3)</sup>、杉浦 みき<sup>3)</sup>、廣島 和夫<sup>1,2)</sup>、梶浦 一郎<sup>1,2)</sup>

**B-6 道具で生活が変わる！**

モジュラー式座位保持装置（スクイーグル®）による在位訓練

<sup>1)</sup>沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 小児神経総合グループ、

<sup>2)</sup>リハビリテーション科

○松岡 孝<sup>1)</sup>、須貝みさき<sup>1)</sup>、松岡 剛司<sup>1)</sup>、大府 正治<sup>1)</sup>、喜久山 至<sup>1)</sup>、  
宮城 雅也<sup>1)</sup>、安慶田英樹<sup>1)</sup>、安里 隆<sup>2)</sup>

**特別講演**

12:00～13:50

**特別講演 1 (12:00～12:50)**

座長 前田 浩利 (子ども在宅クリニックあおぞら診療所墨田院長)

**① 東日本大震災で被災された在宅障害児者への支援活動**

宮城県拓桃医療療育センター 地域・家族支援部長

田中総一郎

**② 3.11 被災地における障がい児者支援の現場から**

CILたすけっと (被災地障がい者センターみやぎ)

菊池 正明

特別講演 2 (13:00~13:50)

座長 田村 正徳 (埼玉医科大学総合医療センター小児科教授)

## 我が国の小児在宅医療の現状の分析と提言

子ども在宅クリニックあおぞら診療所墨田 院長

前田 浩利

シンポジウム 14:00~17:45

### 「それぞれの立場からの小児在宅医療支援」

座長 船戸 正久 (大阪発達総合療育センター

重症心身障害児施設フェニックス園長)

緒方 健一 (おがた小児科・内科医院、熊本大学臨床教授)

#### (1) 病院小児科の立場から

奈倉 道明 (埼玉医科大学総合医療センター小児科)

#### (2) 在宅療養支援診療所の立場から

松本 務 (あおぞら診療所高知潮江副所長)

#### (3) 療育センターの立場から

小沢 浩 (島田療育センターはちおうじ小児神経科)

#### (4) 小児科診療所の立場から

緒方 健一 (おがた小児科・内科医院)

#### (5) 訪問看護の立場から

梶原 厚子 (クロス・サービス訪問看護ステーションほのか)

#### (6) ソーシャルワーカーの立場から

平野 朋美 (埼玉県立小児医療センターソーシャルワーカー)

#### (7) 患者家族の立場から

小西 彩・尊晴 (バクバクの会)

(8) 行政の立場から

山岸 暁美（厚生労働省医政局指導課在宅医療推進室主査）

(9) NICU から療育まで

船戸 正久（大阪発達総合療育センター重症心身障害児施設フェニックス園長）

(10) シンポジウム指定発言

Community Base の障がい児医療

藤沢市における継続看護連絡会の活動について

船曳 哲典（藤沢市民病院こども診療センター）

閉会挨拶

17：50

側島 久典